



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	小児看護実習において看護学生が印象に残った場面を振り返ることによる学習効果 - Significant Event Analysis を用いて -
Author(s)	田畑, 久江;今野, 美紀;浅利, 剛史;蝦名, 美智子
Citation	札幌保健科学雑誌,第 2 号:95-100
Issue Date	2013 年 3 月
DOI	10.15114/sjhs.2.95
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/5565
Type	Technical Report
Additional Information	
File Information	n2186621X295.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

報 告

小児看護実習において看護学生が印象に残った場面を振り返ることによる学習効果—Significant Event Analysisを用いて—

田畑久江¹⁾、今野美紀¹⁾、浅利剛史¹⁾、蝦名美智子²⁾

¹⁾ 札幌医科大学保健医療学部看護学科

²⁾ 沖縄県立看護大学

本研究の目的は、看護学生（以下、学生）が小児看護実習を通じて印象に残った場面をSignificant Event Analysis（以下、SEA）による記述から分析し、学生が小児看護実習の体験から学んだ内容を明らかにすることである。研究参加の同意が得られた42名の学生が印象に残った場面は、記載の多い順に【子どもへの説明・声掛け】【子どもが嫌がるケアの工夫】【子どもとのコミュニケーション】【子どもの気持ちへの対応】【家族への対応】【子どもの体調への対応】であった。その場面が、学生にとってうまくいった内容であったのは20名、困難な内容であったのは22名であった。どの学生もSEAを用いて、印象に残った場面を通じてうまくいったこと、うまくいかなかったことを内省し、次への行動指針で子どもに合った関わりについて検討することができていた。教員は、今後も学生が前向きな内省を行えるようファシリテートしていく必要がある。

キーワード：小児看護実習、学生、内省、Significant Event Analysis（SEA）、学習効果

Effectiveness of Reflective Learning in Practical Training in Pediatric Nursing: Application of Significant Event Analysis

Hisae TABATA¹⁾, Miki KONNO¹⁾, Tsuyoshi ASARI¹⁾, Michiko EBINA²⁾

¹⁾ School of Health Sciences, Sapporo Medical University

²⁾ Okinawa prefectural College of Nursing

The authors' team has been using the significant event analysis (SEA) method since 2010 to encourage reflective learning by nursing students. This study was carried out to investigate how this method enhanced the students' learning by qualitatively analyzing their reflection about events they considered as significant. Each of the 42 nursing undergraduates who consented to participating in the study was asked to describe a significant event experienced during practical training in pediatric nursing; analyze the event; and identify issues with implications for future improvement, on the SEA form. The types of events most often identified as significant were "giving information and/or instructions to children" and "doing something to make nursing care disliked by children less distressful", followed by "communication with children", "dealing with feelings and emotions of children", "dealing with family members", and "care appropriate to the child's condition". 20 students found their events positive while 22 found negative. All of the subjects successfully applied their reflective learning to planning a course of action taking circumstances of individual children into account for when a similar event should recur. Teaching staff has an important role of facilitating the reflection process so that it remains constructive and does not become too critical.

Key words : Practical training in pediatric nursing, nursing students, reflection, significant event analysis (SEA), learning

Sapporo J. Health Sci. 2:95-100(2013)

I. はじめに

看護学生（以下、学生）が看護の知識や方法について、「知る」「わかる」段階から「使う」「実践できる」段階に到達させるために臨地実習は不可欠な過程であるといわれている¹⁾。しかし、小児看護実習においては、子どもと接した経験の少ない学生が増え小児看護実習の展開が困難になっており、学生は【小児看護実習へのイメージのギャップ】【子どもとの体験の少なさへの戸惑い】【関係作りへの不安】という困難感を抱えていることが報告されている²⁾。そして、これらの困難感に対し学生自身は、根気強く継続的な関わり、指導者の助言の活用と看護実践の模倣、学生同士の励ましという対処を行っていることが明らかとなっている³⁾。

本学の母子看護実習Ⅱ（以下、小児看護実習）では、学生が小児看護実習を通して印象深く感じた一場面を取り上げ振り返り学びを深めるために、Significant Event Analysis（以下、SEA）⁴⁾ という様式を2010年度より用いている。SEAは英国Imperial College医学部にて臨床実習経験を効果的に指導する方法として開発されたものである。SEAは自己内省を促すような設問になっており、次の行動指針を考えられるようになっている。本学では医学部地域医療総合医学講座の地域医療実習において活用されており、実習体験から深い学びを得るため、またプロフェッショナリズムを学ぶためにSEAを用いた振り返りの導入が有用であったことが報告されている⁵⁾。学生は質問項目にすべて記入したSEAをカンファレンス資料として準備し、実習最終日に学内カンファレンスを行っている。学生3～4人のグループに1名の教員が加わり、司会は学生が行い、教員は必要に応じて助言やファシリテートを行っている。SEAで一度学生自身が内省しているため、カンファレンスにおける意見交換は以前より活発に行われている印象がある。今回、学生が小児看護実習を通して具体的にどのような場면을印象深く感じ、内省することで何を学んでいるのかということ を明らかにするために本研究を行った。

II. 研究目的

本研究の目的は、学生が小児看護実習を通じて印象に残った場면을SEAによる記述から分析し、学生が小児看護実習の体験から学んだ内容を明らかにすることである。

III. 研究方法

1. 研究対象

201X年に、本学看護学科の3年次に小児看護実習を履修しSEA用紙を提出して単位修得した48名の学生のうち、研究協力の同意が得られた42名である。小児看護実習は2単

位90時間の学習活動であり、年齢や診断が様々な子どもを受け持つ72時間の病院実習と、18時間の保育所実習で構成されている。

2. データ収集方法

データは学生が実習後に提出した既存資料であるSEA用紙であり、この資料をデータとして活用した。

3. 分析方法

SEA用紙には、学生が実習を通じて印象深い場面と、(a)なぜ意義深いのか、(b)なぜ起こったのか、(c)うまくいったこと、(d)うまくいかなかったこと、(e)どのようにすればよかったのか、(f)次への行動指針について記載する。これらのデータの印象深い場面と(c)(d)(f)について、文章のまとまりを抜き出し記述内容の類似性に着目してカテゴリー化した。分析過程では研究者間でディスカッションを行い分析結果の妥当性確保に努めた。印象深い場面については各場面の記載人数と学生にとってうまくいった場面・困難であった場面の人数を集計した。

4. 倫理的配慮

札幌医科大学倫理審査委員会にて承認を得た後、学生には文書と口頭で、研究の目的と趣旨、既存の資料を使用すること、協力の任意性と撤回の自由について、個人情報 は厳密に保護すること、成績には影響しないこと、研究成果の公表について説明を行った。学生による研究協力同意書への署名と提出をもって同意が得られたとみなした。

IV. 結 果

学生が記載した内容を「」、場面ラベルを【】、サブカテゴリーを〈〉、カテゴリーを《》に示す。

1. 小児看護実習で印象に残った場面

学生が記載した小児看護実習で印象に残った場面の例を表1に示した。その内容により、6つの場面【子どもへの説明・声掛け】【子どもが嫌がるケアの工夫】【子どもとのコミュニケーション】【子どもの気持ちへの対応】【家族への対応】【子どもの体調への対応】に分類された。場面毎の人数と、その内容が学生にとってうまくいった場面・困難な場面であった人数を表2に示した。

【子どもへの説明・声掛け】と【子どもが嫌がるケアの工夫】の場면을それぞれ10名、【子どもとのコミュニケーション】を9名が記載した。印象に残った場面が、「子どもに合わせた説明により行動変容が見られた」「(子どもが)上手にできた」などとうまくいった場面であったのは42名中20名であった。うまくいったことを記載した割合が半数以上であった場面は、【子どもへの説明・声掛け】【子どもが嫌がるケアの工夫】【子どもとのコミュニケーション】であった。一方、「促したがその後も様子が変わらなかった」「行えないことがあった」などと学生にとって困難な場面であったのは22名であった。

表1 学生が印象に残った場面の例

場面ラベル	記載内容の要約
子どもへの説明・声掛け	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達段階に合わせたリーフレットを作成し、母親と一緒に説明すると行動変容が見られた。 ・吸入を嫌がるという情報だったが、子どもの好きなおもちゃを準備して理解に合わせて吸入の目的を話しながら行くと、嫌がらずに吸入を行えた。 ・痰を出しやすくするために水分摂取を促したが、その後も様子は変わらなかった。 ・清拭を自分でできる範囲をやるよう伝えたが行わず、母親と指導者からの声掛けで行えた。
子どもが嫌がるケアの工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・嫌がる口腔ケアを、頑張れたら張るシールを約束すると上手にできた。 ・検温を拒否され行えないことがあった。
子どもとのコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめは子どもにどのように接したらよいかわからなかったが、話しかけたりおもちゃなどで距離が近づいた気がした。 ・創部痛のある子どもに好きなものや食べたいものを質問したが、痛みを我慢してかすれたような声で話してくれる状況となってしまった。
子どもの気持ちへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の意思で空のランドセルを背負い装具を使用して病室まで帰ることになり、途中膝をついたが歩行することができた。 ・子どもが自力では時間内に食べ終わらず残念そうにしていた。
家族への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・母親から情報収集している際に、子どもへの悩みや思いを語ってくれた。 ・便秘への対応方法を考えたが、母親の考えと違いが生じてしまった。
子どもの体調への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・プレイルームで呼吸苦もなく活気もあり遊んでいたが、SpO2値が低下して病室に戻った。

表2 学生が印象に残った場面とうまくいった場面・困難な場面であった人数（N=42）

場面ラベル	うまくいった場面	困難な場面	合計人数
子どもへの説明・声掛け	7	3	10
子どもが嫌がるケアの工夫	5	5	10
子どもとのコミュニケーション	5	4	9
子どもの気持ちへの対応	1	6	7
家族への対応	2	3	5
子どもの体調への対応	0	1	1
合計人数	20	22	42

表3 学生がうまくいったと捉えたこと

対象	カテゴリー	サブカテゴリー
学生	情報収集・アセスメント	<ul style="list-style-type: none"> ・情報収集できた ・親から情報収集できた ・子どもの好きなものを見つけた ・問題が見つかった
	環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> ・説明の環境を整えた ・子どもの安全を確保した ・子ども同士が遊ぶ機会となった ・親の協力を得られた
	子どもとのコミュニケーション	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと遊ぶことができた ・子どもとの距離が縮まった ・子どもにあやまることができた ・子どもと話げできた ・積極的に関わられるようになった
	子どものやる気を促す関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・約束して子どもの意識づけができた ・子どものやる気を促した ・一緒に目標を決めた ・褒めて子どもの意欲を高めた ・子どもの興味をケアに活かした
	子どもができるようになるための関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・説明したため子どもが行えた ・工夫することで子どもが行えた ・子どもが行えるよう援助した ・声掛けしたため子どもが行えた ・約束することで子どもができた
	子どもへのケアの実施	<ul style="list-style-type: none"> ・ケアが行えた ・呼吸苦を軽減できた
	親との関わり	<ul style="list-style-type: none"> ・親の話を傾聴した ・親の意欲を高めた
子ども	子どもの反応	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもがうまくできた ・子どもがうれしそうだった

2. 学生がうまくいったと捉えたこと（表3）

学生がうまくいったと捉えたことには、学生自身のことと子どもの反応が含まれていた。

学生自身のこととは、〈子どもの好きなものを見つけた〉〈問題が見つかった〉などの《情報収集・アセスメント》、〈説明の環境を整えた〉〈子どもの安全を確保した〉などの

表4 学生がうまくいかなかったと捉えたこと

対象	カテゴリー	サブカテゴリー
学生	情報収集・アセスメント	・情報不足だった ・先のことを考えていなかった ・子どもの予定を考えていなかった ・自分だけで判断していた
	環境づくり	・物品の準備不足だった ・親の協力を得られなかった ・工夫が思いつかなかった ・方法・環境づくりが適切ではなかった
	子どもとのコミュニケーション	・積極的に関われなかった ・機嫌により拒否されることがあった ・子どものふざけすぎにけじめをつけられなかった ・子どもの思いに気づかなかった
	子どもに合わせた関わり	・子どもに合わせてあげられなかった ・時間がかかりすぎた ・子どもに集中してもらえなかった ・うまく声掛けできなかった
	子ども・親の反応	・子どもが対応したらよいかわからなかった ・子どもが転倒してしまった ・子どもの集中力が続かなかった ・子どもと母親がぶつかってしまった

表5 次への行動指針

カテゴリー	サブカテゴリー
情報収集・アセスメント	・十分情報収集する ・子どもの様子と体調をよく観察する ・子どもの体調への対応方法を検討する ・情報収集方法と内容を検討する ・子どもの関心に気づく ・関わりを振り返る
環境づくり	・プレパレーションの環境を整える ・子どもが自分の気持ちを話す機会をつくる ・周りの人に助言を求める ・遊びの環境づくりをする ・家族の協力を得られるよう働きかける
子どもとのコミュニケーション	・一緒に過ごす ・笑顔で声掛けする ・けじめをつける ・子どもの気持ちを傾聴し共感する ・丁寧に接する ・もっとアプローチする ・コミュニケーションのとり方を工夫する ・メッセージを伝える
子どものやる気を促す関わり	・約束で意識づけをする ・子どもの思いをふまえて援助する ・子どもが納得できるよう関わる ・子どもの関心に合わせて情報提供する ・やる気が出るような声掛けをする ・説明・声掛けのタイミングを考慮する ・子どもと一緒に目標を決める
子どもができるようになるための関わり	・子どもに合わせて説明をする ・子どもに合わせて行う ・ディストラクションを行う ・子どもが自分で行えるよう援助する ・段階的に援助していく
家族との関わり	・家族の思いを受け止める ・情報提供する ・家族の関心に気づく ・家族に説明する

《環境づくり》、〈子どもと遊ぶことができた〉〈子どもとの距離が縮まった〉などの《子どもとのコミュニケーション》、〈子どものやる気を促した〉〈一緒に目標を決めた〉などの《子どものやる気を促す関わり》、〈説明したため子どもが行えた〉〈約束することで子どもができた〉などの《子どもができるようになるための関わり》、〈呼吸苦を軽減できた〉などの《子どもへのケアの実施》、〈親の話を傾聴した〉などの《親との関わり》の7つのカテゴリーに分類された。

《子どもの反応》には〈子どもがうまくできた〉〈うれしそうだった〉が含まれた。

3. 学生がうまくいかなかったと捉えたこと（表4）

学生がうまくいかなかったと捉えたことには、学生自身のことと子ども・家族の反応が含まれていた。

学生自身のことは、〈情報不足だった〉〈子どもの予定を

考えていなかった〉などの《情報収集・アセスメント》、〈物品の準備不足だった〉〈工夫が思いつかなかった〉などの《環境づくり》、〈子どもに積極的に関われなかった〉〈機嫌により拒否されることがあった〉などの《子どもとのコミュニケーション》、〈子どもに合わせてあげられなかった〉などの《子どもに合わせた関わり》の4つのカテゴリーに分類された。

《子ども・親の反応》には〈子どもの集中力が続かなかった〉〈子どもと母親がぶつかってしまった〉などが含まれた。

4. 学生が次への行動指針として考えたこと（表5）

学生が次への行動指針として考えたことには、〈十分情報収集する〉〈子どもの様子と体調をよく観察する〉〈子どもの体調への対応方法を検討する〉などの《情報収集・アセスメント》、〈プレパレーションの環境を整える〉〈子どもが自分の気持ちを話す機会をつくる〉〈家族の協力を得

られるよう働きかける」などの《環境づくり》、〈一緒に過ごす〉〈笑顔で声掛けする〉〈子どもの気持ちを傾聴し共感する〉などの《子どもとのコミュニケーション》、〈約束で意識づけをする〉〈子どもと一緒に目標を決める〉などの《子どものやる気を促す関わり》、〈子どもに合わせて説明をする〉〈段階的に援助していく〉などの《子どもができるようになるための関わり》、〈家族の思いを受け止める〉〈家族に説明する〉などの《家族との関わり》の6つの項目に分類された。

V. 考 察

1. 子どもに合わせた説明・ケアの工夫は印象深い関わり

学生は、受け持つ子どもの発達、興味、疾患や検査・処置に合わせた声掛け、説明、子どもが嫌がるケアの工夫に取り組んだこと、そして、それらにより子どもが行えたりやる気になったりしたことを印象深く感じていた。学生自身あるいは子どもが「できた」「行えた」という表現より、学生にとって達成感を得られる出来事であったといえる。

森ら⁶⁾は、小児看護実習で検査・処置を受ける子どものケアを体験した学生は、【子どもの特性】【不安・恐怖を緩和する物理的環境】【安心につながるケア】【身体拘束の是非】【プレパレーションの意義・自己の課題】【子どもが主体となる医療・看護】について学んでいたことを報告している。子どもに合わせた説明や嫌がるケアの工夫に取り組むためには、学生は子どもの疾患や治療だけでなく、子どもの発達や関心・興味、気持ちなど、子どものことを多面的に理解しようとアセスメントし、具体策を検討しておくことが必要である。当学科では学内の講義や演習に、子どもの権利や倫理、子どもに合わせた説明やプレパレーションなどについて、繰り返し学べるよう意図し組み込んでいる。しかし、実習において、これらのケアを行うための学習や準備は、学生にとっては非常に時間を要するものであり、受け持つ子どもの病状や実施される検査・処置に迫っていくのが困難な状況もある。臨床指導者と教員が連携して、学生が子どもに合わせた説明やケアの必要性に気づき、その機会をとらえて取り組めるよう支援していく必要があると考える。

2. 子どもとのコミュニケーションの難しさ

学生が、小児看護実習における子どもとのコミュニケーションに困難を感じていることについては、これまでも報告されている^{7), 8), 9)}。子どもとのコミュニケーションは、学生が子どものことを理解し、看護過程を展開していくためには大変重要なものである。まだ言語でのコミュニケーションがとれない子どものサインをどう捉えるか、疼痛があり話すことにも苦痛を感じている子どもにどうかわるか、あるいは、実習初日は子どもの機嫌で拒否されていたが、根気強く子どもの興味のある遊びを展開することで親しくなることができたなど、学生は、子どもとのコミュニ

ケーションに関する様々な場면을印象深く感じている。

柴¹⁰⁾は、学生が子どもと友好的なコミュニケーションをとれるようになるには、【接近手がかり探究行動】【融和化接近行動】【実習課題的ケア行動】を示していたと述べている。【接近手がかり探究行動】は〔行動モデルの参照〕と〔患児の興味の探索〕の2つの下位概念で構成されており、〔行動モデルの参照〕の背景に《指導者や家族と患児との相互作用場面を見学する機会》が存在していたことを明らかにしている。学生が、実習初日から、家族や臨床指導者あるいは教員の子どもへの関わり方、子どもの反応、また、子どもの好きなおもちゃや好きな遊びなどについて、意識的に情報収集して学生自身の子どもとのコミュニケーションに活かしていけるような助言も必要である。

3. 小児看護実習で印象に残った場面を通して内省する機会

SEAを用いることで、学生は実習で印象に残った場面を通して、うまくいったこととうまくいかなかったことを振り返る。学生が記載した内容は、それぞれ具体的であったり抽象的であったりするが、次への行動指針で子どもに合わせた関わりについて検討するに至っている。学生にとって困難だったと感じていた出来事の中でも、うまくいったことがあると実感でき、前向きな内省を行う作業に取り組むことができる。

内省を取り入れた教育は、臨床実習経験を効果的に指導するために有用と言われている^{5), 11), 12)}。しかし、このSEAを用いた内省は、学生が自分の感情にも触れることとなる。Hendersonら¹³⁾は、学生がSEAに取り組む際に葛藤を感じていること、そしてその葛藤を軽減あるいは解決するための教員の方策として、学生がSEAを完成させるための情報の提示、内省的な学習に慣れていないことの認知、例の提示、学生がSEAに実現可能なイメージをもち完成させる過程と内省による学習の必要性を理解することの保証、理解と実施に必要な時間の提供、学生と教員間の信頼とオープンな関係の促進をあげている。

また、学生が主体となり、完成させたSEAを用いて3～4人でグループワークを実施し、学生同士で活発な意見交換を行っている。これには一度印象深い場面を通して内省を行っていることが影響していると考えられる。大西ら¹²⁾は、医師を対象とした教育方法に関する報告において、グループワークの際の温かい雰囲気作りはSEAの実施において重要な点であると述べている。実践の裏にある感情が吐露されることもあるが、批判的にならず、前向きな意見交換になるよう、教員のファシリテートも重要である。

VI. おわりに

本研究により、小児看護実習を通して学生は、子どもに合わせた説明やコミュニケーション、嫌がるケアの工夫に取り組んだことを印象深く感じていたこと、SEAを用いて内省し、どの場面においても、子どもに合わせた関わりを

導き出す機会となっていたことが明らかとなった。教員は、今後も学生が前向きな内省ができるようファシリテートする必要があると考える。

文 献

- 1) 文部科学省ホームページ《2012年8月11日アクセス》
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#top)
- 2) 西田みゆき、北島靖子：小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要14：44-51, 2003
- 3) 西田みゆき、北島靖子：小児看護学実習での学生の困難感のプロセスと学生自身の対処. 日本看護研究学会雑誌28(2)：59-65, 2005
- 4) Henderson E., Berlin A., Freeman G., et al.: Twelve tips for promoting significant event analysis to enhance reflection in undergraduate medical students. Medical Teacher 24(2)：121-124, 2002
- 5) 宮田靖志、八木田一雄、森崎龍郎他：地域医療必修実習における“Significant Event Analysis (SEA) を用いた振り返り”の検討. 医学教育39(3)：153-159, 2008
- 6) 森浩美、澤田みどり、岡田洋子：検査・処置を受ける子どものケアを体験した看護学生の学び—小児看護学実習終了後のレポート分析から—. 日本小児看護学会誌20(1)：25-31, 2011
- 7) 西田みゆき、北島靖子：小児看護実習における学生の困難感. 順天堂医療短期大学紀要14：44-52. 2003
- 8) 山村美枝：小児看護学実習の教員のかかわりに関する文献検討. 日本小児看護学会誌. 16(2)：49-54. 2007
- 9) 山本美佐子、篠木絵理：学生—子ども間の関係性発達支援による対象理解の深まり. 看護展望29(10)：103-108. 2004
- 10) 柴邦代：小児看護学実習で学生が乳幼児期の患児との融和をめざした行動の影響要因. 日本小児看護学会誌20(1)：32-39, 2011
- 11) Henderson E., Hogan H., Grant A., et al.: Conflict and coping strategies: a qualitative study of student attitudes to significant event analysis. Medical Education 37：438-446, 2003
- 12) 大西弘高、錦織宏、藤沼康樹他：Significant Event Analysis：医師のプロフェッショナルリズムの教育の一手法. 家庭医療14(1)：4-12, 2008